ことの重要性に改めて気づかされる。

アチェの社会復興は終息したわけではない。人々が解消しがたい苦悩や思いを混在させていることが，本書からうかがえる。若い世代の重視する「透明性」や「公平性」の価値観は，イスラムとどう関係づけられるのか，づけられないのか。また支援で交流した非イスラム世界をも含めた関係を，人々の世界観のなかにいかに繰り込んでいくのか。それにそもそも，ともにアッラーを信じていたのに，一方は津波でアッラーのもとに召され，他方は生き残ったことの意義をどう了解し，防災への努力と結び付けていけばいいのか。また防災の必要性を認識しつつも，2012年に起きたアチェでの地震は，科学知識を有した人々を恐怖と不安におとしいれ，適切な避難行動から逸脱させた。なぜか。これらはいずれも，地域研究ならびに人文社会科学研究上の重要な論点となる。アチェの社会秩序の再建は，これからが正念場を迎えることになろう。

（弘末雅士・立教大学文学部）

牧　紀男；山本博之（編著）.『国際協力と防災――つくる・よりそう・きたえる』災害対応の地域研究3. 京都大学学術出版会，2015，xvi＋262p.

本書の基本的課題は，アジアの災害に対する回復力（レジリエンス）の強さを最大限に活かした「アジアの防災モデル」の構築を試みることである。評者にとり，本書の最も重要な視座と思えるのは，災害（自然災害のみでなく，紛争などの人為災害も含む）は社会に深刻な亀裂をもたらすという指摘であり，その亀裂の修復はいかにして可能なのかという問いである。そもそも近代という時代は，人々の間にさまざまな差異，対立，分断を生み出してきた。それに対し，社会，あるいは「社会的なもの（the social）」は，人々の間の統合と連帯を可能とする思想と制度として機能してきた。しかし，今日の災害は，新たなリスクとして社会に亀裂を生み，その修復の方法に関してはいかなる専門家であっても「正しい」処方箋を出すことが不可能な状況に私たちは生きている。そのような混迷と不確実性の浸透する今日の世界において，災害によってもたらされた亀裂の修復に対し，「よそもの」が果たす役割を考察するのが本書の目的である。「よそもの」とは，「他の地域あるいは社会から来た人のことだが，当事者意識を持たずに無責任な関わり方をする人という意味ではなく，同時代に生きる者として当事者意識を持つ存在である。しかも，被災地の外に生活や活動の基盤があることから，支援活動に関わりやすく，被災地にない物資や情報を提供できることに加え，地元のしがらみや利害関係がないために新たな考え方や方法をもたらしうる存在である」（p. 242）。今日，災害の影響は国家の領域を超える広範な地域に及び，国民国家の枠組みをこえた「よそもの」の関与と連帯を可能にする枠組みの構築が急がれる。本書はそのような喫緊の課題に正面から取り組んでいる。

まず，本書の各章を概観してみよう。序章（牧紀男）では，本書が，いわゆる「世界標準防災モデル」が世界のどこでも適用可能という前提には立たないことが指摘される。日本は，「世界標準防災モデル」の完備によって災害に対する抵抗力を高めてきたが，その一方で失ったのは災害について自分で考え，備える能力としての回復力ではないかと問う。対照的に，東南アジアの途上国の人々は，被害は発生するものという前提で，したたかかつしなやかに対応する回復力の強さを持つ。このような回復力の強さを最大限に活かした「アジアの防災モデル」を構想することが本書の目的であると述べられる。

以下，本書は3部によって構成される。第一部「地域の抵抗力をつくる」では，2011年タイの大洪水災害（第1章）と2013年のフィリピン中部を襲った台風被害（第2章）を事例とし，自然災害と地域社会の関わりが論じられる。第二部「回復力によりそう」では，カンボジアの紛争（第3章）と2002年に独立した東ティモール（第4章）の事例から，紛争という人為災害とそこからの復興において，「よそもの」はどのように関われるのかが論じられる。第三部「支援力をきたえる」は，長年にわたりインドネシアの住宅政策への技術協力に関わってきた専門家（第5章）と，企業による

防災対応の専門家（第6章）による活動報告である。

第1章「水害は不平等に社会を襲う」（星川圭介）は，2011年に生じたタイの大洪水に関し，特に被害が集中したチャオプラヤーデルタを対象に，バンコク都心部とその近郊農村において，どのような地域対立が生じ，その亀裂がその後の治水対策にも影響を及ぼしているかを論じている。著者によれば，バンコク都市民の間では，「農村や郊外の人々は氾濫水と共存し受容するものだ」という観念があるという。そのような観念が，農村部を犠牲にしてバンコク都市民を洪水から守る輪中の存在をも正当化してきた。一方の農村の人々は，確かに「洪水はいつものことだから」とか「我々は洪水に慣れっこだから」と語り，その稲作も定期的な洪水に適応したものとなっていた。しかし，生業や生活の都市化が急速に進む中で，農村部の人々の洪水に対する捉え方も変化し，そのことが，治水対策をめぐる都市と農村の深刻な対立を生んでいるという。第2章「自然災害のリスクとともに生きる」（細田尚美）は，従来，「脆弱な国家」と考えられてきたフィリピンにおいて，災害時における公助が期待できない中，地方自治体，教会，NGOなどを中心とした共助の果たし得る可能性を論じている。

第3章「紛争とその後の復興が教えること」（小林知）は，社会的な原因にもとづく災害としての紛争に注目し，1970年から1993年まで継続したカンボジア紛争とその後の復興過程に焦点をあてている。特に，人々の心や対人関係の修復過程と，地雷などの武器の除去という側面に注目しつつ，公の裁判などの解決方法とは別の，他者への共感と配慮にもとづいた人間社会が本来的に備えている回復力にもとづく復興過程を論じている。第4章「『小さな物語』をつなぐ方法」（亀山恵理子）も，人為災害としての東ティモールのインドネシアからの独立をめぐる紛争を論じている。「いかに闘ったか」をめぐる，国家主導の公の語りと記憶が整備されていくなかで，個々の人々の経験の個別の意味づけ，あるいは「物語」は取り残されていく。亀裂の生じた社会の再生には，このような小さな個別の「物語」をつむぎ，記録していくことが必要であることを論じている。

第5章「研究所の成長と共に歩む」（小林英之）は，インドネシア公共事業省人間居住研究所に対する住宅政策に関する技術協力のため，1984年から2007年の長期間にわたって専門家として活動した著者の経験を踏まえ，一外国人が災害に関わることの意味について考察している。第6章「災害でも止まらない社会へ」（小野高宏）では，日本企業のリスク対応戦略に関わる著者が，新たな防災の担い手としての役割が重要になる企業防災を論じている。2011年に生じた東日本大震災とタイの洪水災害を取り上げながら，効率化の進んだサプライチェーンほど災害に脆弱であり，むしろ「効率化」と同時に，いざというときに多様な選択肢を残すための「冗長性や代替性」を融合させることが災害に強い企業の事業環境をつくるという指摘は興味深い。

以上のような内容を持つ本書であるが，冒頭に記した本書の課題，すなわち災害を通して顕在化する社会の亀裂を修復するために「よそもの」が果たし得る役割に関して，何が明らかになり，また何が課題として残ったのであろうか。第1章の星川の議論は，バンコク都市民が抱く「農村の人々は洪水に慣れているから問題ない」という見解を，当事者のものとして無批判に受け入れ，何もなさないことは，「よそもの」の無責任さであるとする。なぜなら，そのような態度は，「氾濫水との共存」の名のもとに都市民と農村部住民との間にきわめて不公平な治水対策を生み出してきた現状を固定化することになるからである。むしろ，我々「よそもの」にもとめられていることは，「過去の社会構造や既存の治水・利水の枠組みといったものにとらわれたタイ政府に対して疑問を呈し，現在のタイ社会に望まれる新しい治水構造を作り上げていくような議論を広くタイ国民の中に起こしていくことであろう」（pp. 48–49）と論じる。この点は，本書の課題に対する，最も明快かつ具体的な提言であるように思える。一方，第2章の細田の議論は，災害時における公助の限界が指摘され，地域の人々の相互扶助を通した共助の活性化が叫ばれる日本の現状と，公助が非常に脆弱ではあるが，人々のさまざまな助け合いの基盤が共

助の豊かさをもたらしているフィリピンの状況を対比的に論じている点が興味深い。フィリピン社会における共助は，とかく腐敗の温床とされる私的な紐帯にもとづく利益の分配としてのパトロンクライアント関係と表裏一体であり，従来はそのネガティブな側面が強調されてきた。しかし，地方自治体，教会，NGO などのリーダーが有するネットワークを構築する力，すなわち「リンキング力」への注目は，公助に頼れない社会における共助の可能性を示唆している。また第 4 章は，紛争についての公的な記憶には回収され切らない小さな「物語」や，「苦難の経験がもつその人にとっての意味」を記録し，伝えていくのは，「内」と「外」の両方に働きかけられる位置にある「よそもの」にこそできることであると論じる（p. 148）。さらに第 3 章では，カンボジアで活躍する日本人の地雷除去専門家の事例が，第 5 章では著者自身が「よそもの」でありながらも，インドネシアの震災復興における住居支援において果たした積極的役割が報告されている。

このように，本書では災害復興における「よそもの」の役割に関する様々な事例が提示されており，示唆に富む。しかしながらその一方で，「アジアの防災モデルの構想」という本書の目的のためには，「よそもの」の介入に関する個別の実践例のみでなく，むしろそのような介入を可能にしつつ，「よそもの」の活動の空間を広げていく構造的要因の解明こそが求められるのではなかろうか。たとえば第 2 章では，フィリピン・レイテ島の台風被災地の周辺地域の市長が災害支援に果たした役割が紹介されている。しかし，伝統的なパトロネージ・ポリティクスの枠組みでは説明できない新たな政治的リーダーの輩出と活躍の意味を明らかにするためには，そのような個人の実践を拘束しつつも可能にする構造的要因の議論が不可欠となろう。確かに本文中には，「1991 年の地方分権化以降に顕著な，首長の政治手腕の変化も影響している」（p. 73）という指摘はある。しかし，分権化の中での国家の後退という統治構造の枠組みに個別のリーダーの存在をより明確に位置づける作業が必要と思われる。本章の議論はそのような構造的要因よりも，むしろ現地社会における「困っている人を見捨てずに助けようとする心」（p. 61）や，「相互扶助精神の強さ」（p. 79）など，きわめて一般性の高い（ある程度どこにでも存在する）規範や道徳が強調されている。むしろ求められるのは，個別地域社会の固有の構造的文脈に根差した共助の比較研究ではなかろうか。また，第 3 章の日本人地雷除去専門家の活動，第 5 章の震災復興社会における住宅支援の専門家の活動にしても，ユニークな個人の活動を可能にしている構造的背景は見えてこない。特に企業のリスク対策を検討する第 6 章では，国家，自治体，市民社会，コミュニティなど，災害による社会の亀裂を修復する諸アクターとのいかなる関係性や配置のもとに，企業防災の活動が可能になるのかという点に関する分析は見られない。

このような若干の疑問点は残るものの，本書は，特に評者のような東南アジア地域研究に携わる者にとっては興味深いものである。共編者の山本博之氏は，巻末のまとめにて，自身の調査地であるマレーシア・サバ州では，「日常生活でも政治経済でも出自が何らかの決定に影響を与えることはほとんどなく，たとえ外来者であろうともその場にどう貢献するかによって判断し受け入れるという社会であった」（p. 242）という。そしてサバを含むマレーシアでは，「さまざまなよそものが当事者として関わることで社会が発展してきた」（p. 243）と述べる。このような社会の特徴は，サバ州やマレーシアのみでなく，海域島嶼部を中心とした東南アジア社会にもある程度敷衍することが可能であろう。このような地域的特性に立脚することで，地域研究による災害・防災研究のさらに豊かな成果が生まれるであろう。

（関　恒樹・広島大学大学院国際協力研究科）

鈴木佑記．『現代の〈漂海民〉――津波後を生きる海民モーケンの民族誌』めこん，2016，346p.

本書『現代の〈漂海民〉―― 津波後を生きる海民モーケンの民族誌』は，著者の鈴木佑記氏（以下，「著者」と記）が 2005 年から 2012 年にかけてタイ南部スリン諸島を中心とするアンダマン海域